

◆2026年2月18日発行ラインナップ◆

- ・2025年農林水産物・食品輸出まとめ
- ・ミモザの黄色は春の訪れ

2025年 農林水産物・食品輸出まとめ

先日8日に行われた衆議院議員選挙で、自民党が圧倒的な勝利（大勝）を収め、経済政策では減税・景気刺激策を推進する方針との事であり、農業政策についても“稼げる農業への転換”“輸出拡大重視”など昨年10月様々なキーワードを挙げていたが、実現に向け加速する事、大いに期待させていただきたい。

扱、今回は昨年2025年の農林水産物・食品の輸出について触れてみたい。2025年の農林水産物・食品の輸出額は1兆7,005億円となり（対前年比+12.8%、2024年は1兆5,073億円）、13年連続で過去最高を更新したが、政府が掲げた2025年目標「2兆円」には到達しなかった。伸びている品目は緑茶（特に抹茶）、米・米加工品、ブリ、牛肉、

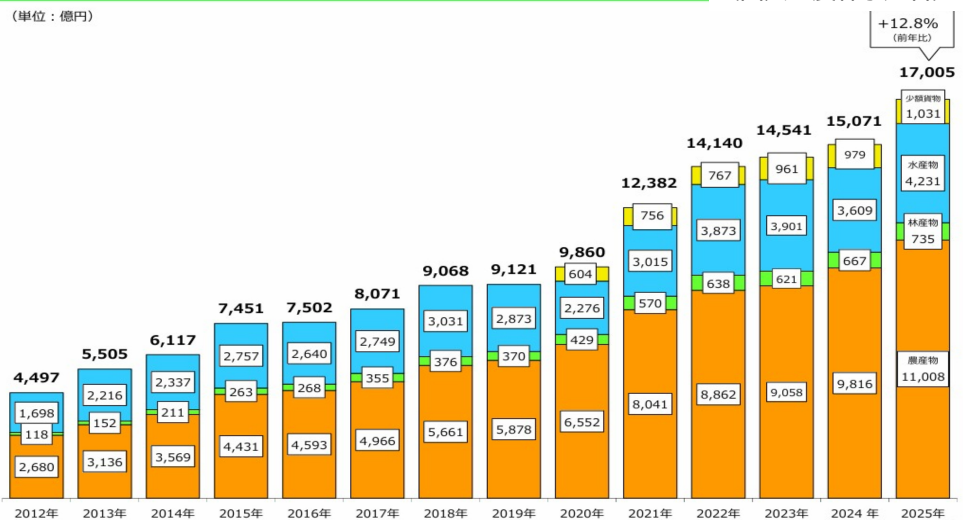
和牛、ホタテ貝などが挙げられるが、特に緑茶は欧米・ASEAN向け等が健康志向や日本食への関心の高まり等を背景に、ラテやスイーツ等の食品原料となる抹茶を含む粉末状茶を中心に増加している。

ブドウ・りんごなどの青果物の輸出は鈍化、シャインマスカットは他国との価格や品質競争が激化しており、りんごは天候不順の影響で台湾などで好まれる見栄えの良い大玉の商品が十分確保できなかった事などが挙げられる。尚、主要輸出先（2025年）は「米国」緑茶や和牛の需要が根強く約2,762億円と輸出額トップになった。次いで「香港」約2,228億円、「台湾」約1,812億円、「中国」約1,799億円（2023年8月以降の禁輸措置の影響が残る）となっており、上位4か国で輸出額全体の大きなシェアを占めている。

輸出増の要因としては①世界的な日本食人気の高まり（寿司・緑茶・和牛など）②健康志向の高まりで茶・海産物の需要増③観光客や海外日本食店の拡大による認知向上などが挙げられるが、一方で輸出の課題として①米国の関税引き上げなど貿易障壁の変動②中国の一部輸入制限の影響③主要輸出先の偏り（米国・香港・台湾が中心）④輸入規制・検疫（国ごとにルールが違う）⑤輸送コスト・鮮度管理など引続き様々な問題・障壁などがあるが、是非政府には「2030年迄に農林水産物・食品の輸出額 中長期目標5兆円達成」に向け積極的な支援策により更なる国内農業の発展、生産意欲向上なども踏まえ今後も輸出が拡大される事、大いに期待させていただきたい。

農林水産物・食品 輸出額の推移

（出典：農林水産省）



品 目	金 額 (百万円)	前年比 (%)
畜産物	142,769	+2.3
畜産物	117,253	+9.2
牛肉	73,105	+12.8
豚肉	2,977	+25.3
鶏肉	2,548	+2.7
鶏卵	8,140	+14.5
牛乳乳製品	30,482	▲ 0.2
果樹・野菜等	71,071	▲ 2.9
りんご	14,369	▲ 28.6
ぶどう	4,669	▲ 21.3
もも	2,474	▲ 16.2
かんきつ	1,436	▲ 3.4
かき・かき加工品	1,118	▲ 1.1
なし	1,141	+11.7
いちご	6,736	+24.6
かんしょ・かんしょ加工品	4,465	+24.0
ながいも	3,721	+10.9
メロン	1,200	▲ 5.9
たまねぎ	123	▲ 62.3
穀物等	78,233	+5.5
米（援助米を除く）	13,880	+15.4
バックご飯等	2,022	+31.0
その他農産物	198,496	+27.3
緑茶	72,094	+98.2
花き	7,872	▲ 19.8
切り花	1,491	▲ 9.3
植木等	6,090	▲ 23.1
たばこ	22,844	+14.5

2025年主要農産物 輸出額の品目別推移（出典：農林水産省）

（次ページへ続く）

一方で2025年は「令和の米騒動」と呼ばれる米の品薄・価格高騰が発生し、外国産米の輸入が急増し、民間輸入量は9万6,834トンとなった。前年の95倍という異例の増加であり、1999年の民間輸入開始以来、最大規模である。今後、国内生産者の収入確保、国産米価格安定化に向け政府の対応・対策についても引き続き期待するところである。

～ミモザの黄色は春の訪れ～

ミモザはオーストラリア南東部原産のマメ科アカシア属の花です。寒い冬を耐え、春先に鮮やかな黄色い花を咲かせます。ミモザの花言葉は「感謝」「友情」「思いやり」など、花のイメージに似合うあたたかい言葉が多くつけられています。

日本でもミモザは近年人気が高まり、温暖な地域を中心に栽培が広がっています。千葉県をはじめ、静岡県伊豆地域・神奈川県湘南エリア・愛媛県など、冬の寒さが比較的穏やかな地域で多く見られます。特に千葉県南房総地域では、早春にミモザが咲き誇り、地域の風景を明るく彩ります。観光地ではミモザをテーマにしたイベントやマルシェが開催され、地域の新たな魅力として注目されています。生花としての日本のミモザ市場は取引量が10年で約3倍、価格は約2倍と上昇傾向にあり、勢いある品目の一つになっています。成長要因としてはSNSにおける鮮やかな黄色いふわふわとした花の「映え」と、「ミモザの日」の拡散が一因として考えられます。若い世代を中心に、ミモザを使ったドライフラワー等の需要も増え、花き市場の活性化にも寄与しています。

「ミモザの日」とも呼ばれる「国際女性デー」は3月8日。女性の権利や社会的地位の向上を考える国際的な記念日です。日本ではまだあまり馴染みのないミモザの日ですが、特にヨーロッパを中心として広く認知されています。1975年に国連で提唱され、1977年の国連総会で議決されました。世界各国でイベントや啓発活動が行われ、女性の活躍を称える日として定着しています。イタリアではミモザの日に男性が家族や同僚、友人の女性にミモザの花を贈る習慣があります。ミモザは特別高価な花という位置付けではなく、誰でも手に取ることができる日常の花であり、「すべての女性に敬意を表す」という文化が自然に根づいたと言われています。

同国イタリアにて開催中のミラノ・コルティナ冬季オリンピックでは、冬季大会史上最も男女均衡的な参加割合となり、女子割合は47%に達しました。1924年開催の第1回冬季オリンピックの出場女子割合が4.3%であったことを思うと、この100年で女性アスリートの活躍の場が大きく広がったことが伺えます。競技の種類も増え、女性が挑戦できるフィールドが確実に拡大していることは、スポーツ界全体の価値観の変化を象徴しています。

女性を祝福する花であるミモザの広がりとともに、日本の女性進出においては2025年には日本初の女性首相が誕生し、政治の世界でも女性リーダーが存在感を高めています。この肥料業界においても同様に女性の活躍が増えてきていると感じます。

3月8日のミモザの日が身近な人を思い返すきっかけになれば嬉しく思います。この機会にぜひご家庭またはご自身にミモザを贈ってみてはいかがでしょうか？(東京支店)



福井県へ行きズワイガニ、セイコガニを堪能してきました。セイコガニの内子と外子が大好きです。家にも蟹が届き、しばらく蟹三昧な日が送れます。

編集事務局：佐藤、山内

電話：03-5275-5511／E-mail：macjournal@mcagri.co.jp

URL <http://www.mcagri.jp>